

## 樹下人物圖について

(圖版第一五圖 参照)

この畫はやくから學界で重視せられたもので(編者註、圖版第一五圖、右)、その傳來については、これが昨年國立博物館に收められるまでの所有者であつた山中商會の所述に據ると、新疆省吐魯番三堡の破城から發掘せられ、清朝末期の新疆布政司であつた王樹枏氏の所藏となり、その後轉輾して山中商會の有に歸したとのことである。

構圖は一本の樹木をうしろに、長袍をまとひ、細い帶の左側に白い短い持物を挟み、長靴をはいて立つた人物が、左少しうしろに侍童を従へ、右斜、低めの方向をじつと見つめながら、右手を頭上に舉げておもむろに黒頭巾を脱ぎ取ろうとしており、侍童は主人の左袖をうしろから双手で支へるやうにしながら、主人と同じ方向に視線を注ぎ、兩人物の前には大小の石四個が無造作に配置されてある。胡粉地の上に太い黒線で主従と景物の輪郭や衣褶を描き、主人の着衣は丹、侍童のは淺黄、木や石や地面は綠青で彩色を施してある。すべてがきはめて簡略な寫生であるにかゝはらず、その自由なわづかな描線で、自然の樹石や深い情を漂はせた人物の顔容態度などを、活き活きと描き出してゐる。新疆の探檢以來、唐代前後の繪畫の獲られたものは少なくないが、その多くは佛畫を始め諸種の宗教畫で、純粹に世俗を描いたのは類例が少なく、たまたま有れば惜しくもひどく破損した斷片に過ぎない間にあつて、ひとりこの畫がほとんど完全に保存せられ、唐代風俗畫の一面を今日に傳へてゐるのは、きわめて珍貴